# ご苦労様とありがとう

橋本　槇矩

松島先生と私の学習院大学におけるお付き合いは、27年にも及んでいることにあらためて感慨深いものがある。私が学習院に来たのは30歳のときで、信州大学の講師の職が内定していたのを断って今は亡き児玉久雄にお声を掛けていただき、学習院大学の講師として赴任した。それから10年後に同じ児玉先生の推奨で國學院大學から移って来られたのが、松島先生だった。専門はイギリス・ロマン派研究で、とりわけ難解を持って知られ、深甚な詩想で知られるウィリアム・ブレイクの泰斗としてもすでに学会に知られていた。気難しい学者を予想していたが、お会いしてみると気さくで話し好きの人で安心した。爾来、教授会や科会の後の談話やお酒の席で楽しい時間をともに過させていただいた。お宅にも呼んでいただき、お酒を飲みすぎて奥様に迷惑をかけたり、お嬢様も誘って一緒に山登りに出かけたりいろいろ思い出はつきない。

松島先生と共に過した英文科の前半の時代は、まだ英文学というよりは文学自体が世の中に訴える魅力を持っていた時代だと思う。しかしそれも最近は、わたしの錯覚だったのかと思うようになった。英文科に来る学生の大半は文学にはほとんど関心が無く、英語が出来るようになりたいという実用的目的で入ってくる。それは昔も今も同じであることを、当時の情熱に燃える若い文学教師であったわたしは見落としていたのかもしれない。しかしお見受けしたところ、松島先生の文学研究への信念は一貫した堅固なものであった。それは院生をメンバーにした読書会「群島水曜会」を20年以上も続けられ、教え子たちによる退職記念論集『ヘルメスたちの饗宴』を世に問われたことにも現れている。日本社会の現状を見るにつれてわたしの中では、文学とくに英文学は埃っぽい路地に投げ捨てられ死んでいるように見える。しかし文学への強い信念を抱き続けている松島先生の文学研究への熱い思いは、最終講義のときにもひしひしとわたしにも伝わってきた。このような熱い英文学研究への情熱がなんらかの

形で「文化研究」に吸収されつくすことなく生き続けて欲しいと思う。退職後は悠々自適、たまには目白に来ていただき、昔のようにお酒をご一緒したい。そのためにもぜひ先生の健康と長命を祈りたいと思う。

（英語英米文化学科教授）